

総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会

議事概要

- 日 時 令和2年11月19日（木）9：45～10：32
- 場 所 中央合同庁舎第8号館 6階623会議室
- 出席者 上山議員、梶原議員（Web）、小谷議員（Web）、小林議員（Web）、
篠原議員、橋本議員（Web）、松尾議員（Web）、梶田議員（Web）
（事務局）
赤石イノベーション総括官、柳統括官、佐藤審議官、江崎審議官、
千原審議官、柿田審議官、高原審議官、
清浦参事官、永井参事官、
篠澤企画官、筋野企画官、中澤企画官

- 議題 基本計画について（指標）
基本計画の評価・モニタリングについて

- 議事概要

午前9時45分 開会

- 上山議員 おはようございます。

それでは、本日の木曜会合有識者議員懇談会を開かせていただきます。

最初の議題は、「基本計画について（指標）」です。

それでは、中澤企画官から説明をお願いします。

- 中澤企画官 おはようございます。

指標及びロジックチャートについて、これまで何度かこの場でも意見交換させていただいてありますが、本日はこの後の議題にて、第6期基本計画の評価・モニタリングをどのように進めていくかということも御議論させていただきますので、そことの連動も含めてですが、資料はこれまで何度か使ってきたものではございますが、新しいロジックチャートを作成しておりますので、そこを御説明させていただきたいと思います。

資料7ページを御確認ください。

何度か、基本計画専門調査会も含めて、教育・人材育成についてこれまで御議論させていただいてきたものをロジックチャートの形で図示させていただいたものです。

上のボックスと下のボックスの二つがございまして、上がこれまでも議論してきました初等中等教育を中心とした探求力や好奇心を進めていこうというのが上のボックスです。

下のボックスが、いわゆる学びのリカレント、社会人を含めて学び続ける姿勢を増やしていこうというのが下のボックスです。

それぞれのボックスの中に三つのボックスが並んでおりまして、灰色のところですが、このそれぞれの三つのボックスを実現することで、これらを実現していこうと。上のところの探求力、好奇心のところは三つ並んでいるうちの一番上が探求力や好奇心を作っていくという部分がありまして、ここの部分は正に初等中等教育そのものでやっていくところ、真ん中のところは外部人材を中に取り入れていくということで、本物に触れる機会を作るところです。それから、下のところは正に教育のDXを進めていこうという話です。

下の方のリカレントについては、キャリアアップ、キャリアチェンジ、これができる人そのものを増やしていこうと、人に着目した個人そのものに着目する。真ん中のところは、個人が学び続けるための企業などの組織、あるいは社会がそれを進めていこうというところ。最後の下のところは、そのリカレント教育を提供する大学自体が大学改革によってリカレント教育をしっかり進めていく。そうしたエレメントを集約していくという形にしております。

これまでも御議論させていただきましたとおり、青が指標ということでモニタリングしていくものです。それから、オレンジが、できれば目標設定していきたいという主要指標です。

いずれにしても、事務局素案ということで関係者、関係省庁とは調整が全くできてない部分ですが、1点、正に科学技術・イノベーション政策らしさという観点でいうと、このオレンジの左上のところにございますが、数学、理科を楽しいと思う生徒、子供たちの割合を増やしていこう。これまでも中学校になる段階で、この割合がガクンと国際的に比較して日本は落ちてしまうところがあるので、楽しいと思える教育、学びの場ができてくるというところはCSTIらしい目標設定だと思っておりまして、そういったところも入れさせていただいております。

あと1点だけ、右の上の青のところ、青いラインの指標ですが、社会における探求力の評価状況ということで、せっかく教育の現場で探求力というものが出たとしても、しっかり就職の採用や入試でそれが評価されていなければならないということを考えておりまして、こういった数字を取ればいいのかというのはこれから考えていかなければいけないのですが、こうしたものも開発していければと思っております。

その他の資料のところは変えてはございませんので、特に、今日は人材教育といったところ

を中心に、ほかのところも適宜含めまして、御意見をいただければと思います。

○上山議員 ありがとうございます。

このロジックチャートは色々なところで使うことになりますが、今日のこの人材育成、教育のところは一番難しいといえますか、何で測るのかとか、それがいい指標なのかも含めて御意見があると思います。事務局の方でこうした案を用意していただきました。ブレストですので、御意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

梶田議員、どうぞ。

○梶田議員 以前も議論があったかと思うのですが、日本はテストの成績では世界でトップですが「自分で国や社会を変えられると思う者の割合」は世界最悪のレベルで、私の個人的な考えですが、恐らくそれが何となく今日本がイノベーションも生まれにくい、社会変革もできない国につながっているのではないかという、そうした思いを持っています。

強い意見ではないのですが、そうしたことを思うと、「自分で国や社会を変えられると思う者の割合」というものは青色の指標のままでいいのか。それともこれが本当に重要だということとを皆さんに認識していただくために、オレンジ色の主要指標に位置付ける方が大切なのかというのは、もう少し議論して考えることではないかと思います。

○上山議員 ありがとうございます。

とても明解で強い御主張だと思って、同じように考える方も多いと思います。何で測るかとか、どのようにそれを継続的に測り続けることができるのかということも難しいですが、確かにずっとこれまで人材育成のところで議論させていただいたことを踏まえるとそうした御意見かと思います。

主要指標に入れるかということは、また事務局と議論させていただきます。

小谷議員、どうぞ。

○小谷議員 私の人生の目標の一つが、数学が大嫌いと言わないような人を増やすということにあるので、「数学・理科を楽しめると思う割合」を目標に入れていただいて大変有り難く存じます。

指標に入れるということはこれを少なくとも誰かが責任を持ってやるということですので、どういうことをイメージされているかということをお教えいただければでしょうか。

私は数学の指導要領改訂の前段階の委員会に参加しました。その当時、ICTを使った小中高の教育の話が出て、インタラクティブな教育とかアクティブラーニングとかを通して考える力を養う議論をしました。しかしながら、現場の先生からは、そうしたことを教えられる教員

がどれぐらいいるかという点、それから今はGIGAスクールの話が出て、ICTが小中高に導入される可能性が高いと思いますが、当時はそのようなことは全然無理で、パソコン教室が授業のときだけ使えるという乏しいICTの環境で難しいのではないか、という指摘を受けました。

そうしたことを考えると以前に、初等中等教育の問題点について橋本議員が言及された点が、変わらないと実際には難しいと思います。

それから、もう一つ教えていただきたいのは、真ん中の少し上に、「教員の時間外勤務時間」と書かれていますが、これは初等中等教育の教員の時間外労働が大変で、楽しい教育をする余裕がなくなっているという観点から、時間外勤務時間を減らすという方向でしょうか。

大学の研究現場で問題になっているのは、若い研究者が自分のキャリアを形成するに当たって、働き方改革と自律的研究をしっかりとやっていくことをどう両立するかということですので、どちらの方向で考えられているのかということをお教えいただければと思います。

○上山議員 最初のどのようにそれをウォッチしていくのかについては、次の議題のところで、評価専門調査会に小谷議員も入っておられますが、多分そこにロジックチャートも関わってくるのだと思います。また、そのときにお話しします。次の質問は、中澤企画官からお願いします。

○中澤企画官 2点あります。後半の方の時間外勤務のところについては、やはり初等中等の段階の教員の負担が増えていますので、これをいかに減らせるかということにDXも含めてできないかということで、何らかの指標を設定したいという趣旨です。

あと前半の方も簡潔に何点かお答えします。小谷議員にも御協力いただいておりますが、SSHのような取組が、正に学習指導要領で全国的に進めていくという話をブーストしていくところだと思います。鍵はSSHが最もレベルの高い教育をしているというものから、子供たちが本当に面白い、楽しいということを進めた結果、レベルが結果的に高くなる、こうした方向に今教育を転換しようとしていると認識しています。

もう1点は、このロジックチャートの真ん中のところにも入れましたが、外部の人を教育現場に連れてくる、これは本物に触れさせて感動を呼ぶというところをいかに増やしていけるかということだと思います。

○小谷議員 SSHは非常に学生の意欲も高く、いい制度だと思っています。実際、今、数学、理科が嫌いだという人の割合、もしくは楽しくないと思う学生の割合が高くなっているかもしれませんが、一方で我々が子供のころに比べると、圧倒的に数学や理科が楽しいと思う機会に

接して非常に高い学力や興味を持っている小中高生も増えているので、そうしたことで取組を拡大していけるということは非常にいい方向だと思います。

○上山議員 それでは、梶原議員、どうぞ。

○梶原議員 私からは、リカレント教育の受講者数を主要指標にしたことについて少しコメントしたいと思います。

企業人が学び続け、学び直しをする手段は非常に多くあります。ここで言っているリカレント教育の定義がどういうものかにもよるのですが、大学ではなく、教育産業で提供されているオンライン講座も非常に多くなっており、そうしたものを受ける時間も増えています。

また、社内教育という言い方をしますが、外部人材を講師に招いて教育を実施するとか、海外の大学へ派遣するケースもあります。この指標の推移を見るためのデータは、大学等のリカレント教育を提供する側、もしくは提供を受ける企業側から集めるのだと思うのですが、企業から見ると受講者数をカウントするのが難しい場合もあります。むしろ、教育のための時間や投資がどう増えていくかというところが重要だと思うのですが、この受講者数はどちら起点のものをモニタリングしようとしているのかを教えてくださいませんか。

○中澤企画官 これは大学以外のリカレントというところもあるのですが、せっかくこの科学技術・イノベーション政策の中の文脈ということでは、大学改革とひも付けて、大学を一つの起点にして、提供側からアプローチできればと思っております。ただ、いずれにしましても、指標自体は様々なとり方のチャンネルはあると思いますので、梶原議員の今の御視点も含めて少し検討したいと思います。

○上山議員 松尾議員、どうぞ。

○松尾議員 私の質問といいますか疑問は、個別の項目にいく前に、3ページの目指すべき社会像、ビジョンがあって、大目的、中目的、小目的がありますと、こうした構造になって、その次にプログラムがありますということなのですが、ここの7ページに書かれている絵は真ん中より少し右側のところの「社会における探求力の評価状況」というのが、この3ページに当てはめると大体中目的ということになるのですかね。

それで少し私が混乱したのは、このオレンジとそれから青の楕円なのですが、これが指標と主要指標となっていて、その定義は3ページに書かれているのですが、私が感じたのは、この主要目標というのは指標のうちでも重要な目標であってより上位に来るのかと思ったのですが、これが中目的のところに青いのがあったり、相当あっちこっちに散らばっているので、ロジックチャートといいながら、この全体の構造が、まだよく理解ができないのです。

それで、これは最終的にもう少しブラッシュアップされてまとまっていくと思うのですが、これを外に出すときにロジックチャートなので、その辺りの関係を明確にしておかないと、非常に混乱するかなと感じた次第です。

個別の指標については、詳細な検討を大急ぎでさせていただきたいと思うのですが、少し全体の構造、目的とか小目的とこの主要指標との関係が一体どのように設定されているのかというのをお聞きしたいのですが、いかがでしょうか。

○上山議員 これは確かに一見するとこのつながりがまだきれいには書かれていませんが、大体おっしゃったような形では並べていると思います。ただ、こうした議論を通して、これをやはり主要指標にするべきだとか、議論させていただこうかと思ったのですが、中澤企画官から補足ありますか。

○中澤企画官 まず、主要指標と目標の関係ですが、まず指標、あるいは主要指標についてはそれぞれの中目標のようなところ、あるいは目標のところを示す代理変数として捉えられるようなものであればということで考えております。

一方で、主要指標については、3ページを御確認いただけますでしょうか。3ページの上から二つ目のポツの更に点の二つ目のところですが、指標のうち、S T I 政策、直接的に取り組むことが可能で、かつ第6期基本計画終了時に検証ができるようなものを主要指標と位置付けているので、比較的直接的に評価できるようなものということで、例えば前回もありましたが、トップ10%論文数とかはかなり時間が掛かるというところもありますので、これは青のままにしていたりするという状況ではございます。主要指標自体はあくまでS T I 政策が比較的直接的に取り組める結果で見えるものということで設定させていただいております。

○上山議員 よろしいでしょうか。もう一度整理して持ってまいります。

○松尾議員 そうですね。そのときに、3ページで、大目的、中目的、小目的というのがある中で、その中に指標①、②、③とあります。これはレイヤーが違うところにこの指標が、このように1、2、3でそれぞれレイヤーの違うところに指標が入っているので、少し混乱しています。大きな目的の指標と小さな目的の指標というのは、レベルだとか中身が違うのだと思うのですが。

○佐藤審議官 実は研究力強化パッケージをやっているときもそうだったのですが、色々な指標を取ろうとすると、ほとんどのものが取れない、または3年ぐらい遅れて出てくる、そのような状況が起こるのです。したがって、本当はそれぞれの小目標、中目標のところにそれに一番適切な対応をするものがしっかりと入って、それを全部フォローアップできればいいのです

が、現在はそうした状況ではないので、取れるものを一応入れた上で、このうち確実に、その時点で取れる、要するに評価に対応ができる、かつ重要であるというのをむしろオレンジにしていると御理解いただいた方がよろしいかと思います。

したがって、これは第6期基本計画で初めてとなる試みなので、これからもっとこのような指標を取ってしっかりとそれをリアルタイムで取るべきだという話があれば、むしろこの第6期基本計画の期間中にしっかりとそうした体制を整えていくということも含めてやる必要があると、そのように理解していただくと、分かりやすいのではないかと思います。

○松尾議員 分かりました。私も、以前意見を言わせていただいたときに、意見を言うのだったら具体的なものを出せと宿題をいただいていたので、是非、至急中身をまた検討させていただいて意見を出したいと思います。

○上山議員 篠原議員、どうぞ。

○篠原議員 今、佐藤審議官がおっしゃったとおり、測定可能なものでなければならないということはよく分かるのですが、上半分を見たときに、一番気になるのは、やはりこれからのSociety 5.0を支える子供たちは、多様性がなければいけないと思います。だから、その多様性をいかに伸ばしていくかという観点ともう一つは失敗を認めて失敗を恐れずにチャレンジを行うような教育、そうしたものがないと、何となく数学、理科を楽しいと思う割合だけが増えて、それで本当にいいのかと、非常に科技的ではあるのですが、逆に言うと科技的過ぎて非常におかしいのではないかと思いますので、確かに測定は難しいかもしれませんが、多様性とかチャレンジ性とか、そうしたところを楕円に書けなくても、角のない四角でもいいので、書いていかないと少しミスリードかと思ったのがまず一つ目です。

○上山議員 そうですね。まずそれを捉える指標というのがすぐに思い付かないですが、この目標値のところに、我々がずっと議論してきましたから、やはりクリエイティブにつながるような多様性、そうした言葉をきちんと入れるべきかと思います。

○篠原議員 それとあと下半分なのですが、この「ジョブディスクリプションを規定している大企業の数」と書いてあるのですが、実は今、経団連の中でも、ジョブ型におけるジョブディスクリプションというのはどこまで書かなければいけないのかという議論があるのです。だから、本当はこのジョブディスクリプションを規定している大企業の数よりもジョブ型の仕組みを導入している企業の数の方がまだいいのかなという感じがしました。

それと最後ですが、先ほど梶原議員もおっしゃっていましたが、リカレント教育というのは、やはり定義ができていなくて、これはやはり早く大学側と産業界側でどんなリカレント教育が

必要なのかというところをこれと並行して進めていかないと測定のしようもないと思います。

この間、三重大大学の副学長がやっているリカレント教育の話を聞きましたが、あれは少し我々の想像しているリカレント教育とは違いました。このリカレント教育というのは言葉だけが先に進んでいるような気がして、ややもするとデータが活用できる人間を作ることイコールリカレント教育みたいになっている部分がありますから、そこはもう少しリカレント教育とは何なのかというのは、この場とは別で少しやる必要があると思っています。

○上山議員 三重大大学というのは、大学側がやむにやまれずああいう形でやってきているというケースで、大企業を踏まえたところでのリカレントとは相当違うという感じがあります。大学側とすると新たな社会貢献、地域貢献のところでああいう提案をしているということだと思います。かなり幅広いところで、指標も含めて取れるような方向性を第6期基本計画の期間中に作っていくということなのかと思います。

橋本議員、どうぞ。

○橋本議員 今、篠原議員がおっしゃったことの最初の方に関連して、全く同じことなのですが、それから梶田議員が言われたこととも同じなのですが、この上のところの、「自分で国や社会を変えられると思う者の割合」とか、そうした話に絡んで、この前、皆さんでお話を聞いた工藤先生（横浜創英中学・高等学校長）の話に私は非常に感激したのですが、多くの方もそうではないかと思うのですが、ああいう方の御意見を聞いてみますか。

彼はそうしたことを広めようとしながら実はうまくいっていない。それはなぜかといいますと、彼ははっきり言わなかったですが、あの後に色々フォローしてみると、教育委員会をトップとする、もっと上に行くと教育大学をトップとするヒエラルキーの中で新しいことが中々入っていない、そうした構造になっているらしいのです。

実際にやっている方がどういうことを指標としたらそうした状況が改善していけるのかということは多分非常に感じているのではないかと思います。指標のためにはどうしたらいいのか、どういうものがあるのかということについて、工藤先生に聞いておられますか。

○中澤企画官 すみません、まだ聞けておりません。ただ、あの後、連絡は何度か取り合っていました、そのときに少し言われたのは、本当に来れてよかった、国の会議の場であれだけ闊達な自由なことを言えたのは初めてで、とても感動したとおっしゃっていました。非常に、工藤先生、そうしたところでこの会議の場を好きになっていただいたのだと思いますので、指標についても相談させていただきます。

○橋本議員 彼は本当にやろうとしている方なので、最終的な結果だけではなくてどういうこ

とが変わっていくと、こうなっていくのかということをととても感じておられるのだと思います。是非意見をしっかり聞いて、指標として入れるのだったら、どういうことがいいだろうかということを書いて、またここで報告していただけるとありがたいので、お願いいたします。

○上山議員 はい、ではフォローしておきます。

では、小谷議員。

○小谷議員 今、篠原議員や梶田議員がおっしゃられたことはよく分かるのですが、数学や理科を楽しいと思う割合に関して、先ほどSSHという言葉が事務局から出てきました。SSHで行っている理科や数学の探求は、いわゆる授業で受動的に習う理科や数学というものとはかけ離れていて、自分たちの生活の中で見つけた問題をどうやって理科や数学の問題に落とし込んで解決をするかということを書き考える、学生が例えばグループになって考えるとか、そのようなことをしています。「数学や理科を楽しいと思う割合」という書き方によって、それが例えばSSHやSSH的な課題に取り組むような教育や機会というもので測るのであれば、篠原議員や梶田議員が言われたようなことが含まれてくると思っています。

「理数探求」という言葉がその少し下に書いてありますが、「理数探求」とは、この間、工藤先生が見せてくださったような学習を目指しています。ただ、先ほど申し上げたように、そもそも初等中等教育にインフラの意味でも指導者の面でも、教員の余裕という意味でも整っていないと、結局うまくいかないのではないかと思います。

東北大学では実はAO入試で入る方の成績が非常にいいです。多様な観点で、いわゆる成績という観点とは違う形での入試で合格していますが、入った後の大学の成績、その後のキャリアについて有意に高い結果が出ています。多様な人材を育てるということやそうしたことを通して、モチベーションの高い人材を育てるということは非常に意味があります。そうしたことを測るのに本当に適切になるかどうかは分かりませんが、SSHとかAO入試というものは、測る何らかのメジャーにはなる可能性があります。

○上山議員 ありがとうございます。

時間が相当過ぎているので、松尾議員は今手が挙がっておられますが、次の議題でまた反映していただけますか。

○松尾議員 了解です。

○上山議員 基本的にこれは我々の方でやるべきことは、例えば初等中等の教育のシステムにどのような、例えば齟齬が生じているとか、あるいはそれを作っているような教育系のプログラムの在り方みたいなことなのだろうと思っております。それも含めて、少し今後入れてい

きたいと思います。

どうもありがとうございました。

では、次の議題である「基本計画の評価・モニタリングについて」にいきます。

○高原審議官 基本計画の評価の在り方について、検討してまいりましたので、その内容について御説明申し上げます。お手元の資料「基本計画の評価・モニタリング（状況確認）に向けた検討」に沿って御説明申し上げます。

2 ページになりますが、まず基本計画と統合戦略との連動の在り方の全体像です。C S T I の司令塔機能として基本計画の進捗状況を適切に把握して評価していく、これがまず第 1 点です。そして、更に二つ目のポツですが、基本計画と統合イノベーション戦略の連動性を高めていくということでもあります。これを今正に議論していただいておりますロジックチャートに沿って、これを活用して見える化をしながら進めていくという在り方です。

続いて 3 ページです。

基本計画と統合戦略との P D C A サイクルですが、御覧のように、C S T I と各府省、大まかにゾーンで色分けしておりますが、基本計画の策定、統合戦略の策定からプログラムの実行、そして今回御提案する評価の在り方、それをまた改善していくという、この P l a n、D o、C h e c k、A c t i o n のサイクルによるプロセス管理であります。この中で、ここには書いておりませんが、実際にそれぞれのプログラム、個別の施策、実際にうまくいったかかなかったかというところの影響の解析、フェイラーモードを解析していくことと、うまくいかなかった原因、その中でも特に真因となるところをフォルトツリーを見ていく、このフェイラーモードとフォルトツリーというものを入れてこの P D C A を回して科学技術の発展、イノベーション創出に向けていく。こうしたサイクルを作るための評価の在り方を検討していきたいと考えております。

続いて 4 ページですが、今後の年度ごとの反映の流れのイメージを示しております。

上段に年度が書いてありますが、第 5 期基本計画のところは正に今、D o をして、C h e c k をして、そして第 6 期基本計画の策定へと今進めてきている訳ですが、中段の第 6 期のところを御覧いただきますと、2 0 2 0 年度で 6 期基本計画の策定を行い、2 1 年度から始まる第 6 期基本計画であります。評価を進めていき、2 0 2 2 年、この統合戦略では 2 1 年度で進めてきた基本計画、統合戦略の結果を評価していくという形で、年度単位で単発ではなくて評価連続性を見ていきながら、続いて第 7 期基本計画につなげていくという考え方です。

5 ページには、今、お話ししましたモニタリングと呼んでいる在り方の統合戦略の策定まで

の流れを四半期ごとに示しております。この中では、中段にありますとおり必要に応じて基本計画を改訂していきながら進めていくという機動力を持ちながら毎年度ごと統合戦略の、一番下の段になりますが、検討を行い、閣議決定、概算要求、そしてそれらを評価し、翌年度またその予算執行とともに、その評価を進めていくと、こうしたサイクルを回していくということです。

6 ページに、今、お話ししました C S T I による評価と各府省の評価の連動について見える化を示しております。

上段が C S T I の在り方、下段が各府省の在り方とあります。先ほどから議論になっております C S T I の基本計画の枠組みで大目的、中目的、小目的というものがございます。こうしたもののモニタリング、あるいは今後デジタル化されていくプログラムのデータの整理、分析の在り方、そして一番右手にあります、あらかじめ評価のルールや指針を提示して進めていくという中で、中段にあります評価基盤システムと仮称で呼んでおります、e-C S T I の中に、研究開発強化に関するデータベースを設置していくことを検討しております。これらをもって、C S T I と各府省でそれぞれのプログラムの進捗状況、そして結果を共有していくというものであります。

続いて、7 ページですが、基本計画を評価していく単位、括り方ではありますが、基本計画そのものと連動していくということでもありますので、上段の二つ目のポツにありますとおり、イノベーション力 4 項目、研究力 4 項目、人材育成、資金循環、この 10 項目程度を現在想定してロジックチャートを基に進捗状況の把握・評価を行っていくのではないかと考えております。

最後、8 ページになります。

基本計画の評価そのものの視点等でありますが、評価の視点として五つ、(1) から (5) まで挙げております。御覧のような並びであります、特に 4 番のこれらを進めていく上で、障害となっている課題の明確化やあるいは各府省の連携や役割分担の明確化や重複回避、こうしたところを司令塔として重要な役割でありますし、同時にこれらを 2. の評価の手順に沿って進めていく中で、C S T I の司令塔としての客観性を担保したアセスメントの確立が重要となってまいります。これらを進めていけるような在り方を検討していきたいと考えております。

本日はこれを基に御意見を賜りたいと思います。よろしく申し上げます。

○上山議員 ありがとうございます。

具体的にいいますと、評価専門調査会という舞台を実際にこのような計画と戦略を動かしていく場として使うということと、これはそれぞれに関わったここにおられる議員の先生方と外

部の先生方も含めて、それがきちんと各省ごとに動いているかどうかを確認していくという作業です。

頭の中にありますのは、ここにおられる方では、橋本議員と小林議員、小谷議員もおられましたが、政策討議というのをかなり本格的にやりました。これは赤石総括官が主導されたのですが、非常にうまくいって、とても面白かったです。各省を呼んで色々な議論をしました。

それをもう少しシステマティックにやるべきではないかという意味では、評価専門調査会という部隊が有用だと個人的には思っておりますが、是非とも先生方の御意見をいただきたいと思います。

いかがでしょうか。先ほどのロジックチャートのものとも相当関わるのですが。

梶原議員、どうぞ。

○梶原議員 評価専門調査会でもコメントしたのですが、モニタリングするためのデータをいかに効果的かつ効率的に収集できるかということがポイントであり、行政のデジタル化ともうまく合わせて実現していくことが重要と思います。

データを使って評価分析を行うという意味では専門人材の登用も必要でしょうし、ある意味では一定の中立的も考慮することが重要と思います。また、御説明では、とても大きな構想になる訳ですが、実際には小さく始めて、プライオリティをどこに置いて確認していくかということを考えながら、PDCAよりも、むしろOODAループで、その場で変えていくとか、どういったやり方がいいかと試行錯誤しながら進めていくことが重要と思います。ある特定のプロジェクトの一部をまずはやってみて、成功体験を積んでいくという回し方をするのがいいのではないかと思います。

○上山議員 ありがとうございます。

データといっても、それで一義的に決まるというよりもむしろ議論をするための資料を提出するぐらいの形なのだと思います。それにしても、それをきちんと作っていくことも大変なんだろうと思いますが、一步一步そうしたことをやっていくことがCSTIの司令塔機能につながるのではないかと、個人的には思っているところです。

ほかにいかがでしょうか。

松尾議員、どうぞ。

○松尾議員 先ほども申し上げたのですが、こうしたPDCAサイクルを回すときに、特に大目標、中目標、小目標というのがあって、それぞれ達成度などを評価するときには当然大目標と小目標というのは多分分かりやすいと思います。相当具体的な施策があって、目標があって、

それがどの程度達成されたか。

中、大となると、それらを統合してより大きなかたまりになるので、この論理、例えば大きな目標としてGDPを日本が世界何位になるとか、生産性何位になるというのは結構大きな目標になると思います。これをブレイクダウンすると色々な施策に落ちますと、それがどの程度達成されたか。

もしGDPだとか生産性の目標が達成されないときに、そこから導き出された小目標のどれが駄目だったので、全体的に達成されなかったか、みたいなことがきちんと分析できるような格好になっていないと、冒頭申し上げたのですが、大、中、小目標、それぞれの具体的な指標のチェック、それをどういうふうプランの見直しにつなげていくかみたいところが、論理的になるように是非作っていかないといけないという感じを持ちました。

以上です。

○上山議員 これはトライアンドエラーでやっていくしかない、この話を聞いたときには思いました。それをやはり具体的に毎年の評価専門調査会の議論の中で確認していくというプロセスなのだろうと思っております。

○松尾議員 私も全く同じ意見です。

初めから完璧なものができる訳ではないので、やってみてこうした指標が足りなかったというのは適宜追加したり、あるいは削ったりしていくべきだと思います。

○上山議員 小林議員、どうぞ。

○小林議員 松尾議員とほとんど似たような話になりますが、この間こうしたレビューに向けて、事務局が真摯なストラクチャーをお作りになったのは素晴らしいと思います。

一方で、各項目によって時間軸も違いますので、PDCAサイクルをきちんと回す意味では、評価専門調査会という組織をしっかり作って、民間企業で言えば、取締役会と全く同じようにモニタリング機能を十分発揮させるべきだと感じています。

また、モニタリングそのものも時間軸として1年単位、半年単位で行うべき項目がある一方で、例えば一つの重大なアイテムとしてこの前も指摘させてもらいましたが、NISTEPの調査で、2002年から2017年にかけて主要国の中で日本だけがクロスボーダーの商標登録が全然増えずに特許出願だけが多いという、世界の大勢と比べると異常な実態が明らかになっています。こうした動きのPDCAとかモニタリングは、やはり相当時間軸が長くならざるを得ませんし、逆にSIP的なもののモニタリングは本当にショートタームでやらなければいけない訳です。したがって、この辺りは正にトライアンドエラーでとにかく始めてみるという

ことぐらいが正解ではないかと思います。あまりリジッドに考え過ぎるとエネルギーばかり掛かって大変なのではないかという感想を持ちました。

○上山議員 ありがとうございます。

この議員の先生方でモニタリングをしていく、少し取締役会に近いような感じですが、その場として評価専門調査会があってもいいのではないかとあって、こうしたトライアルをやって行って、そしてシステムに作っていく、そして次の世代に引き渡すということではないかと思っています。

佐藤審議官、何かありますか。

○佐藤審議官 実は松尾議員と小林議員に言われたことが1点で、こうしたのはやると見直しをするというのが大事なので、そこをどの目標レベルで見直すのか、あるいは政策レベルで見直すのかというのを是非やらなければいけないというのが一つです。

一方で、実は事務的にいいますと、A I 戦略でやったのですが、1個1個の施策ベースのフォローアップをすると、大体各省庁いい加減なことを言うてくるので、それを詰め出すとそれだけで非常に莫大な時間が掛かって大変なことになるというのがあれでして、ボトムアップの方も相当なチェックは大変なので、チェックをした上で見直しをやるというのは正に骨格を変えずに毎年基本計画を議論し直すようなものなのです。

皆さん心してやっていただかないと大変なことになりますということで、そうした意味では最後小林議員が言っていたように、何でもかんでもやるのではなくて、もしかしたら少しターゲットを決めて年ごとにやるというやり方もあるかもしれないですし、その辺りの進め方自体も是非皆さんで議論していただいたらよろしいのではないかと思います。

○上山議員 そうですね。前の政策のときにもエネルギーならエネルギー、大学問題なら大学問題とターゲットを決めてやりましたから、それに少し近いかもしれません。

私はここにいませんでしたが、S、A、B、Cという政策評価をやっていて、Cを付けられると、その省庁のプロジェクトの予算が削られるということをやっていました。それはあくまで印象論でやっていたというところもあるので、こうした形でそれをもう少しシステムにすることで、この有識者議員の方々の意見が反映されるということなのだろうと思います。

少し時間も押しておりますので、この評価・モニタリングについてはこうしたことを考えて提案するということにとどめたいと思います。何度も出てきましたが、実際に進めて行って、その中で問題点を見つけていくしかないかと思っております。

では、よろしくお願いします。

どうもありがとうございました。これで公開の議題を終えます。

午前10時32分 閉会